国際演劇交流セミナー 2013《ドイツ特集》 マルコ・シュトアマン SHOWCASE

演劇人のためのブレーンストーミング ～新たな創作環境を切り開く～

たとえば、アーツカウンシルの分野では、「環境問題・教育や健康・社会的包摂・先住民の知恵・非行や犯罪・コミュニティの再建」など、実に様々なことが議論され、文化の社会的役割が検討されています。
実演家である私たちは、日々真摯にそしてひたむきに作品創作に携わっているわけですが、少し観点をずらせば、作品創作に打ち込みすぎて、逆に盲目的になっている可能性だってあるかもしれません。
私たちは「劇空間」へと足を運ぶ市民に、いったいどのような「新しい観点」や「新しい価値観」を提示できているのでしょうか。あるいは多様な表現媒体が存在する現代で、「演劇」という表現行為はどのような社会的役割を担えるのでしょうか。
「一つのテキストを上演する」というアソビのもとに、ジャンルも経験も立場も違う演劇人が集い、いろんなことをテーマに議論と思考を重ねます。このブレーンストーミングは、参加される一人一人が、自分自身で気づき、表現者としての間口と奥行きを広げられるプログラムです。

ブレーンストーミングの意義

日本では演出技術を学ぶことは容易ではありません。多くの日本の演出家は独自の感性や経験をもとにその技術を各自で確立させています。しかし、時代の変遷は目まぐるしく、従来のやり方や考え方だけでは創作活動がうまくいかない現実もあります。
芸術団体に於いても、一人のカリスマが主導する時代から、より特化・分化したプロフェッショナルとの協働創作活動を必要とする時代へと変化しています。演出家・実演家だからこそ、真摯に自身と向き合い、他者と関わり合い、改めて自身の感覚や思考を見直し、新たな表現領域を手に入れる必要があるのではないでしょうか？

ブレーンストーミングのねらい・意図

今回招聘するマルコ・シュトアマン氏は、いわゆる単なる講師という立場ではなく、一人の実演家として日本の演出家・演劇人たちと一緒にブレーンストーミングに参加します。
従来のワークショップにあったような「教える－教えられる」という垂直方向での国際演劇交流ではなく、「学び合い－深め合う」という水平方向での交流を行うためです。一つのテキストを題材に、参加者１人１人が上演のためのアイデアやイメージを持ち寄り、お互いに比較し、テキストに描かれている内容を掘り下げ、様々な問題を提起しながら話し合いを繰り返します。そうして言葉を尽くし、「学び合い－深め合う」中で、以下の３つの「演劇人としての力」を広げていきます。

1、読解力：より魅力的な上演を実現するためのテキスト読解力。
2、言語力：自分のイメージやアイデアを他者へ伝え切るための演出言語力。
3、内省力：自身の感情や思考・行動と真摯に向き合うための自己内省力。

【海外招聘講師】
マルコ・シュトアマン（演出家）

1980 年ハンブルク生まれ、ベルリン在住。
演劇集団クルトゥア・フィリアーレの創立メンバー。
2005 年までミュンヘンのオットー・ファルケンベルク校にて演出を学び、卒業後は、ハンブルク・タリア劇場、ベルリン・フォルクスビューネ、ミュンヘン小劇場などで、ヨッシ・ヴィーラー、アンドレアス・クリーゲンブルク、シュテファン・キミッヒのもとで働く。学生時代にも、ワイマール国立劇場、およびコンスタンツ劇場にて演出を行っている。2005 年から 2007 年まで、ハノーファー劇場などで、ラース＝オレ・ヴァールブルク、ショルシュ・カメルン、ヴィルフリード・ミンクスらの演出助手を務めた。2003 年にはザルツブルク演劇祭の演劇マスタークラスに奨学生として参加し、また 2004 年に演出を手がけたニール・ラブート作『物事の尺度』は、その年の最優秀若手演出賞にノミネートされた。2007/2008 年のシーズンより、フリーランスの演出家として、ハンブルク、ウィーン、デュッセルドルフ、シュトゥットガルト、オーバーハウゼン、ハノーファーで活動している。
2010 年には、初の映画作品『7,8 月』も製作した。

※ブレーンストーミングの進み具合により、各日の内容が若干変更される場合があります。

【なぜ今回このテキストを選んだのか？】
『夜への長い旅路』『セールスマンの死』は、ともに近現代戯曲の古典的代表作であり、現代にも訴えかける力を持った「普遍的な物語」であると語られ、繰り返されているが、果たしてそうだろうか。
これらの作品で描かれている「家族の葛藤」と「社会のあり様」は、劇中でも一部は停滞し、破綻している。そして現在、二つの作品を読み直してみると、描かれたた綻びが前景化し、古色を帯びながらも、より親しく感じることも出来る。社会とは何だろうか、家族とは何だろうかという答えの出ぬ問いに囲まれながら、これらの作品を今一度読み直し、「自分に問いかける」ために、これらの戯曲を題材にする。

【国際部】篠本賢一・青井陽治・鵜山仁・貝山武久・坂手洋二・堀江ひろゆき・松本祐子・家田淳・大橋宏・金田海鶴・川口典成・黒川逸朗・小林拓生・佐々木治己・左藤慶・佐川大輔・田中孝弥・中野志朗・林英樹・洪明花・前嶋のの・松森望宏・森井睦

【ブレーンストーミングの進め方】
全ての参加者が公平に発言し、短時間で活発な意見交換ができるように、主にカフェダイアログ形式を用いながらリラックスした雰囲気で話し合いを進めます。

１日目　火曜日　作品全体を俯瞰してみる日

①上演企画書の発表と自己紹介
各自が「何に興味を持ち、何を軸に演出プランを構築したか」を共有します。
②センテンス・キーワードなどの抽出
参加者それぞれの「現時点のアイデア」を一旦この場に広げ、相対的に見えて来るものから、新たな観点や問題点を探ります。

２日目　水曜日　作品内容に踏み込んでみる日

①ダイアログ　＜作品に書かれているテーマについて＞
このテキストには何が書かれているのか？
家族とは何か？社会とは何か？などについて話し合いを進めます。
②ダイアログ　＜作品の持つ魅力や価値について＞
このテキストのどこが良いのか？そもそも何のために書かれたのか？存在価値は何か？などについて話し合いを進めます。

３日目　木曜日　作品内容に更に踏み込んでみる日

①ダイアログ　＜作品の具体的なシーンや台詞について＞
印象的なシーンや興味深い台詞、特定の登場人物にフォーカスして上演するためのより具体的な話し合いを進めます。
②ダイアログ　＜上演する意義や課題について＞
上演をする上で最大のハードルは何か？ 何が追い風となるか？
上演する現代的意義は？翻案するならどうする？など上演の可能性を見直します。

４日目　金曜日　作品から一旦離れてみる日

①研究者によるレクチャー＜文化・演劇の社会的役割について＞
研究者をゲストとして迎え、実演家とは別の観点から、演劇という表現の魅力、価値、意義、役割、課題を見直します。
ゲスト：内野儀（演劇批評）他
②ダイアログ＜演劇以外のアプローチについて＞
例えば、この作品を一枚の絵で表現するとしたら？
演劇とは別の表現手法で作品世界を表現してみることで改めて作品世界を捉え直します。

５日目　土曜日　参加者同士で何をするか決める日

①ダイアログ＜話し足りないことや一見関係なさそうなことについて＞
どんな話をするかその時にならないと分かりません。これまでのブレーンストーミングを通じて、もっと話したいことや話さざるをえないことなどを取り上げます。
②グループワーク＜更なるアイデアを求めて＞
様々なケースを想定し、上演という現実と理想の葛藤・妥協点から、上演の目的や意義を再確認します。お互いのアイデアに乗っかったり、悪フザケもしたりして、これまで考えが及ばなかったことに気付いてみようという試みです。

６日目　日曜日

第１部　（東京会場 14:00 ～ 16:00 ／福岡会場 13:00 ～ 15:00）
ブレーンストーミング参加者による演出プランのプレゼンテーション
第２部　（東京会場 16:15 ～ 17:45 ／福岡会場 15:15 ～ 16:45）
マルコ・シュトアマン氏によるレクチャー
第３部　（東京会場 18:00 ～ 19:00 ／福岡会場 17:00 ～ 18:00）
ブレーンストーミング参加者とマルコ・シュトアマン氏による座談会